5歳児クラスにおける造形表現活動の実践報告：大阪樟蔭女子大学附属幼稚園での実践報告Ⅲ：土粘土および陶芸材料を用いての造形指導

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-02-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安部, 永 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4435

5 歳児クラスにおける造形表現活動の実践報告 大阪樟蔭女子大学附属幼稚園での実践報告Ⅲ： 土粘土および陶芸材料を用いての造形指導

児童教育学部　児童教育学科　安部　　永

要旨：本学附属幼稚園での造形指導も 5 年が経過し、様々な新しい素材・教材を取り入れて実践を行った。本稿では特に土を用いた立体造形の 3 種の題材を取り上げ報告する。第 1 は粉末粘土を用いた平面的な要素の多い粘土活動。第 2 は陶芸用道具と土粘土を用いて、切る、固める、丸める、のばすなどの立体的な活動。第 3 は様々な調整土の中でも化粧土を新しい素材に選択し、立体物と泥漿を組み合わせることで立体的な活動と平面的な活動を組み合わせる。素材と戯れ遊びとして成立する粘土素材を用い子どもたちが色んなこと感じ、体験し、子どもたちのもっている表現する気持ちをどう引き出すかを主題に造形指導に取り組んだ記録である。

キーワード：造形表現、造形指導、土粘土、陶芸、こども

1　はじめに

本研究は土粘土を用いての実践報告である。平成 25 年度より、本学附属幼稚園において、5 歳児を対象に絵画教室を開催している。それは日頃の活動の中ではできない、作品ありきではなく、「造形の行為（プロセス）を大切にした絵画指導」を幼稚園で実践してもらいたいという園側の要望がきっかけであった。

幼稚園教育要領＜平成 20 年度告知＞における環境領域ねらいには「(3) 身近な事象を見たり，考えたり，扱ったりする中で，物の性質や数量，文字などに対する感覚を豊かにする。」と記されており、その内容において（7）身近な物や遊具に興味をもってかかわり，考えたり，試したりして工夫して遊ぶ。」とある。筆者は表現領域のねらい「(3) 生活の中でイメージを豊かにし，様々な表現を楽しむ。」と非常に関係したものと考え、今回の実践においても着目した部分である。

その教室も 4 年が経過し、様々な実践を行ってきた。28 年度、29 年度と過去の絵画教室の実践もふまえ、いろいろな素材に注目し、子どもたちが初めて取り扱う素材・材料を用意し子どもたちの表現したい気持ちを引き出すことはもちろん、遊びの中での表現活動も視野に入れて取り組んでいる。本研究は、その実践の中で特に粘土教材を用いたものについての報告である。

2　実践報告

実践期間：平成 28 年 7 月～平成 30 年 11 月うちの 3 回の粘土造形の実践について報告および考察を行う。
実践例①「砂で描いてみよう」
実践例②「粘土で作ろう」
実践例③「化粧土で描こう」
実践報告の手順として以下の 7 項目をたてた。

1.1　設定　環境設定の工夫
1.2　題材研究
1.3　制作手順
1.4　子どもたちの様子　子どもたちの取り組みと作品の質
1.5　作品例
1.6　考察
1.7　資料（指導略案）

なお倫理的な配慮とし園長に研究の目的、方法、研究協力に関する説明をし、データおよび個人情報の取り扱いの配慮、研究目的以外では使用しないことを明記した書面を作成し同意を得た。

2.1　実践例①

附属幼稚園絵画教室
場所：大阪樟蔭女子大学附属幼稚園
対象：5 歳児
題材：「砂でかいてみよう」

2.1.1　設定

環境設定の工夫として、教室全体にブルーシートを敷いて、多少周りが汚れてもかまわない状況にしておく。非常に細かい砂（童仙房）を使用するため、教室の汚れには気を付ける。そのうえに画板と４つ切り画用紙を人数分用意しておく。

2.1.2　題材研究

この時期に粘土教材を選んだのは、前３回の平面的な活動から、後半の立体制作へのつなぎの教材として最適であると考えたからだ。今回は子どもが関わる新しい素材として童仙房を選択した。

2.1.3　制作手順

画板のまわりに子どもたちを座らせる。導入として、まず大量の童仙房を提示し、子どもたちの興味を引く。その後、直接触ってもらう。すると初めての素材に対しての感動の声があがる。次に、バットを用意し、紙コップに入れた童仙房を配布する。子どもたちからは「童仙房とバッド」という組み合わせの戸惑いと、期待感が感じ取れる

まずは童仙房の特性を知るためにバッドの上にさらさらとまいていく。すると子どもたちはこちらが指示をせずともバットを傾けたり、ゆらしたり、指で模様を描いたりすることを楽しみ始める。その遊びを楽しんだのち、筆と水を提示する。童仙房は粘土質の成分があるため水分を加えることにより、紙に固着する。砂であれば粘性がなく、水分を加えてもそのままでは紙には定着しないので、画用紙を配布することで、砂で絵を描くことが可能となる。

2.1.4　子どもたちの様子

砂遊びはなじみのある活動であるが、その砂と酷似しているが、まったく質の異なる童仙房を表現活動の教材として活動をおこなうことは初めての経験であろう。子どもたちが童仙房の感触を楽しんだのち、制作に入るのであるが、遊びの活動が面白く、童仙房を紙コップからバッドに移したり、また戻す行為を楽しんだりと微細な粉の感触を体感している様子が見て取れた。またバットに移してからは、指絵を楽しんだ。通常の砂では粒子が荒いため、子どもの指の力では繊細な絵が描けないが非常に軽い粉末のため子どもたちの非力な指先でも楽しみながら描けたようである。またバットを両手で持ってふるいのように扱うことで童仙房の表面がまた平面に戻り、何回も指絵を楽しむことができることに気づいた子どももいた。その行為をある程度楽しんだのち、提示された画用紙と筆で描画活動を行ったが、水に童仙房が固着することで、スピード感のある力強い線になったり、また意図した細かい線を描けず苦労する子どもなど様々な個性的な展開が見て取れた。ただどうしても画板上での活動となり、個別的な活動になってしまった。非常に微細な粉末のため、服なども汚れるが、その汚れも子どもたちにとっては魅力的らしく、楽しい様子であった。

2.1.5　作品について



図①

図①は原始芸術の趣もあり非常に面白い。童仙房の痕跡が面白いようで、子どもたちがバットの上で繰り返し絵を指で描いては消し、描いては消しを繰り返している中で生まれた形である。



図②

図②はバットで遊んだ後、童仙房に水を混ぜると固着することを経験したのちの作品である。紙コップの中で泥漿状になったもので描いている。ただ、絵の具のような滑らかな描き味ではないので、力あふれるダイ

ナミックな線が生まれた。山崎つるこ（2000）は、少し困らせ、抽象的な制限を与えることで、頭の中で何かがはじけ、発想が生まれ、大人には顔負けの意外性、明快さがうまれるのです。と述べている。水と混ざり切っていない童仙房がかすれ、それが効果的なアクセントとなり面白い表現となった。

2.1.6　考察

童仙房とは、陶芸の専門道具の一種であり、いわゆる調整土と呼ばれるものである。筆者は冒頭に述べたように子どもたちが初めて取り扱う素材・材料を用意し、それを遊びの中での表現活動として活用したいと考えた。土粘土にもはじめてかかわるこどもがいる中、粉末粘土はましてや、まったく初めてかかわる素材であろう。磯部・福田（2015）は、まず幼児期において最も重要となることは、直接に物にかかわり、物への感じ方を深めていく過程である。この段階なくして子どもの豊かな育ちを考えていくことはできないだろう。と述べている。この度の活動はそういった意味でも子どもたちが素材に対して試行錯誤する様子が見て取れ、制作中に意図せず童仙房の入ったバットに水がこぼれ粘土状になり、泥の絵になり、それを紙の上に描く試みを行った子どももあり、粉に水をくわえ、バケツなどで混ぜ、粘土にしていく工程など、立体的な活動に展開させることができればより、面白いものになったのではないかと推測される。

2.1.7　資料

平成 28 年 7 月 5 日

題材「砂で描いてみよう」略案

時間	幼児	指導者（補助）	準備物・環境
14：00	講師の説明を聞く ・砂をさわる ・紙コップに砂をいれる ・感想を言う ・バットで遊ぶ	自由な環境を心掛ける。	タライ ブルーシート 画板 童仙房 500 グラム 紙コップ ボウル
14：10	・講師の話を聞く ・水を使って描いてみる。 ・余った砂をまたカップに集める。	童仙房が水で固定化されも模様になることをうながす。 ・カップに上手に砂を入れることができるよう補助	作品写真
14：45	制作終了		活動の様子
14：50	手を洗いに行く	クラスごとに	
15：00	保護者と帰る	保護者にこどもを引き渡す	

2.2　実践例②

附属幼稚園絵画教室

場所：大阪樟蔭女子大学附属幼稚園

対象：5 歳児

題材：「粘土で作ろう」

2.2.1　設定

環境設定の工夫として、教室全体にブルーシートを敷いて、周りが汚れてもかまわない状況にしておく。土粘土を使用するため、教室の汚れと換気には気を付ける。そのうえに粘土板を人数分用意しておく。

2.2.2　題材研究

普段なかなか園ではできない粘土遊びを積極的に取り入れることで、幼稚園教育要領にも示されているいろいろな素材に親しみ工夫して遊ぶことが体験できる教材として最適であると考えた。今回は子どもが関わる新しい素材として陶芸道具を選択した。

2.2.3　制作手順

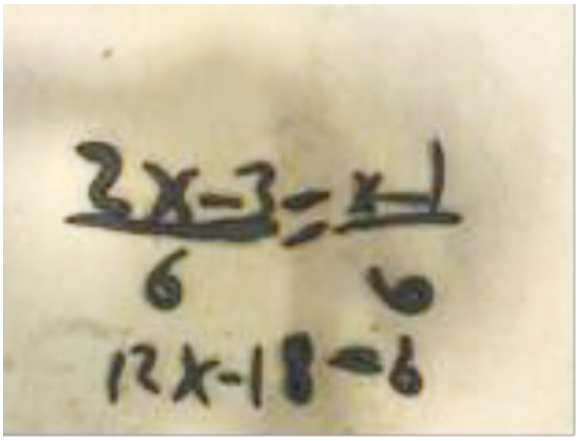
導入として、指導者が大量の粘土の塊 20 キロを提示し、子どもたちの興味を引く。素材の重量感を体感してもらい、その硬さのある粘土をワイヤーで、簡単に切断するとより一層歓喜の声があがる。それから子どもたちに棒状の粘土 10 キロを提示し、先ほどのワイヤーで各自切断の体験し粘土を準備させる。

そして、自由にこどもたちと粘土を対峙させてみる。すると、手で広げたり、指で丸めたり、ちぎったりと各々の活動が広がっていく。しばらく遊んでいると、男児が先ほど指導者が提示したワイヤーを使用したいと提案したところで、陶芸用切弓を各自に配布する。道具で遊ぶ子ども、切弓に飽きて粘土を踏んで遊ぶ子どもなど様々に活動が広がっていく。随時、へら・くしなど描画できる道具などを提示し、40 分ほど活動したのち、制作の終了を告げる。制作の継続の意思の

ある子どもも多数あるが、次回の絵画教室で土粘土の器づくりを提案し、片付けに入る。

2.2.4　子どもたちの様子

導入で、粘土の重さを体感させるのだが、子どもたちは我先にと「持ちたい。」と発言する。もちろん 20 キロもあるので到底持つことはできないが顔を真っ赤にして体験してくれる。「重たい。」「石みたい。」と発言が見られる中、その塊の粘土をワイヤーで簡単に切断することで、子どもたちは驚きと感嘆の表情で指導者の導入に見入る。この驚きの気持ちが造形活動のきっかけとして非常に大切なことではないだろうか。その後、個人でワイヤーを使用する際も、鮮やかな切れ具合に驚きの声があがり、素材の持つ特有の粘性を肌で感じ取っていると思われる。新しい材料「陶芸切弓」を与えると野菜をきるように、細かく切断する子ども、切弓をペンのように使用して模様を描く子ども、また形状的に上手に扱えず、すぐ使用するのをやめる子どもなど様々であった。第 1 回目の粘土の活動なので自由に制作をしていると、ひもにして細かい細工をしていく活動（図③）、粘土を板にこすりつけ伸ばしていく活動（図④）、ちぎって細かくしていく活動（図⑤）、ひたすら球体を作っていく活動。のばして伸ばして大きな面積にしていく活動（図⑥）など様々に個性的な活動を楽しんいた。



図③



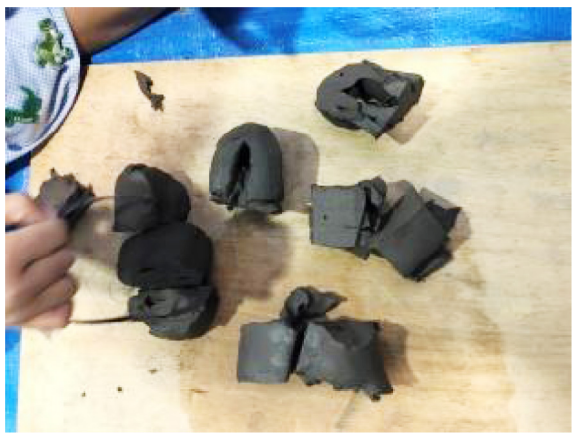
図④



図⑤



図⑥



図⑦

2.2.5　作品について

図③のひも状の作品は数名の子どもたちが制作していた。数字へのこだわり、漢字へのこだわりなど、様々なものを吸収している時期特有の表現であろう。図④は、粘土の感触を楽しみ、粘土の粘性を理解し、指のストロークもとても力強い作品である。図⑤、図⑦は陶芸材量の切弓を使った作品である。粘土はその独特な粘性のためへらやナイフなどではきれいに切り取ることがむつかしいため、ワイヤーなどの摩擦が起きにくいもので切り取る。その切り取る行為の感触が心地よいのか、それを繰り返し楽しんでいる作品である。図⑤においては、切り取った上に串などで模様を描きこんで、パズルのような広がりのある作品となっている。図⑥は伸ばしたり、丸めたり、ちぎったりした粘土を板の上でバンバンたたくと粘土がのびて各パーツが重なり合ってくる。意図せず何か出来上がってくる線が生き生きとしてとても楽しい表現となっている。

2.2.6　考察

深谷ベルタ（2018）がとても軽い素材と重い素材の組み合わせから、予想外の遊びや表現が生まれます。素材遊びは決まった形に向かうものではありません。手で感じる、手で考えることこそが素材遊びの醍醐味です。と述べている。今回の保育では新しい材料・素材として陶芸材料を提示してみた。それはへら、ワイヤー、切弓、串などである。粘土自体のへのかかわりはもちろんであるが、新しい道具を子どもたちに与えることで、大変興味深い活動となった。へらをあたえると、力任せに切ってみたり、突き刺してみたり、積極的にかかわる様子がみてとれ、最終的にはへらに粘土を巻き付けるなどの行為も出てきた。作るための道具を作品の１部分として使用する行為などはとても子どもらしい発想であろう。切弓の切れ味は子どもの興味をそそるようで集中してずっとその遊びを楽しんでいる子どももいた。ただ、道具での活動はどうしても個人的かつ細かい行為になりやすい傾向があった。

2.2.7　資料

平成 30 年 10 月 12 日

題材「粘土でつくろう」略案

時間	幼児	指導者（補助）	準備物・環境
14：00	講師の説明を聞く ・粘土遊び ・粘土を広げる ・道具で遊ぶ	粘土を感じることができるよう見守る。 ・適宜、新しい道具を提示していく	ブルーシート 画板 土粘土１人１キロ ワイヤー 切弓 くし へら
14：45	制作終了 ・粘土を片付ける	・各自身の回りの粘土を集めるよう促す	
14：50	手を洗いに行く	クラスごとに	
15：00	保護者と帰る	保護者にこどもを引き渡す	

2.3　実践例③

附属幼稚園絵画教室

場所：大阪樟蔭女子大学附属幼稚園

対象：5 歳児

題材：「化粧土で描こう」

2.3.1　設定

この度は化粧土と呼ばれる泥漿を使用するため、環境設定の工夫として、教室全体にブルーシートを敷いて、周りが汚れてもかまわない状況にしておく。教室の汚れと換気には気を付ける。そのうえに粘土板を人数分用意しておく。手洗いようのバケツを各所に配置しておく。

2.3.2　題材研究

普段なかなか園ではできない粘土遊びを積極的に取り入れることで、幼稚園教育要領にも示されているいろいろな素材に親しみ工夫して遊ぶことが体験できる教材として最適であると考えた。今回は子どもが関わる新しい素材として調整土（化粧土）を選択した。

2.3.3　制作手順

前回に引き続き、導入は粘土遊びを行う。子どもたちを集めて目の前でひねり出しの技法で動物を作って興味関心を持たせ、各自１キロずつの粘土を配布する。自由に遊ばせ、粘土の感触を楽しませたのち、器づくりに進む。一度、指導者の話をしっかり聞けるように、使用している粘土を回収し、新しい粘土 500 グラムを配布する。20 分ほど遊んだ粘土は水分がなくなって、焼き物を作成するには不向きであることを子どもたちに伝える。粘土を拳で叩きながら土をしめて皿状に広げる。その後ふちを立上げて皿を作る。その際、準備してきた調整土を子どもたちに見せて、各自好みのも

のを使用させる。調整土として準備したのは、化粧土としてコバルトを用いた色化粧、黄土、童仙房で、それを自由に使用させる。

2.3.4　子どもたちの様子

粘土を提示すると子どもたちは、「お皿つくるの。」と前回のことをよく記憶しており、粘土遊びをすることに躊躇する子どももいた。粘土の水分がなくなり、粘土が固くなることに気づいて「固いから替えて。」との声が上がったあたりで、新しい粘土を配布し、粘土の板を作る作業に入る。するとリズミカルに粘土を叩きほとんどの子どもが上手に円形の形を作ることができた。ふちを立上げる作業では指が小さいため、ふちの先が尖ってしまい、やぶれてしまうことがあった。その後、調整土で装飾を行う。各自、好きなものを選択させたが、コバルトの色化粧を選択して、全面に塗る子ども（図⑧）もいれば、串で模様を描いた部分のみ塗る子どももいた。黄土を選択し筆で点を描き、童仙房の粉を上にまぶしたり（図⑨）、またそれを指で



図⑧



図⑨



図⑩



図⑪

なぞると、模様がはっきりと出てくることに気づいたこどもは一生懸命その作業を繰り返していた。（図⑩）

2.3.5　作品について

図⑧はお皿の上に顔のような模様を描き、コバルトの色化粧を施している。子ども独特の筆使いのため、荒々しい感じがでて迫力がある。図⑨は黄土化粧を施し、その上に模様を彫ることで、下の素地が見え、色の変化が出ることに気づき、ほのぼのとした図柄が愛らしい。童仙房をまぶすことで、雲のような感じになっているのが特徴的である。童仙房を振りかける行為が楽しいのか、せっかく描いた模様を消してしまっているのも非常に面白い表現となっている。図⑨はお皿の上に模様を描いたのち、童仙房を振りかけ、それを手でこすると何とも言えない質感が生まれ、均一になっていない子どもらしい行為が面白い表現を作り出している。図⑪は素焼き焼成後のものである。淵の表現が様々であり、焼成により色の変化がおこっている。本焼きするとさらに色の変化がおき、実際子どもたちが

作った作品と趣が変化するので、作品を返却するときの子どもたちの反応もとても興味深い。

2.3.6　考察

新しい材料・素材と子どもたちにどのように関わっていくのか。「調整土」は陶芸用の材料であり、本来は粘土等に混合することにより、耐火度を上げたり、化粧土として使用したり、釉薬として使用する材料である。筆者は子どもたちが初めて手にする素材としてその素材に着目し、教材化を試みた。今回は、指導者の想像を超える活動に発展した。セチェイ・ヘルミナ（2003）は子どもが何かに没頭するのは、自分の好きなように、そして体験に沿って創造できたときです。～中略～創作への没頭は丁寧さをもたらします。と述べているが、特に粘土の上に模様を描き、さらにそれをこすって遊ぶ活動は砂場での子どもたちの実体験が造形につながったものではないかと推測され、とても集中した活動となった。焼成することで、さらに面白い効果が得られた。（図⑪）。平面的な作品（皿）にこだわらず、大量の粘土を用いて立体的に造形をしていくことでさらに面白い表現が生まれてくるのではないだろうかと推測される。

2.3.7　資料

平成 30 年 11 月 9 日

題材「化粧土で描こう」略案

時間	幼児	指導者（補助）	準備物・環境
14：00	講師の説明を聞く ・化粧土を触る。 ・指で絵を描く	化粧土を体感させる	化粧土 ブルーシート 黒模造紙 画板 ボウル
14：20 14：25	・講師の話を聞く ・粘土で器を作る。 ・化粧土を塗る	焼き物(粘土でお皿を作ることを理解させる ・作品に名前を描く	作品写真 土粘土１人 0.5 キロ 紙コップ
14：45	制作終了		活動の様子
14：50	手を洗いに行く	クラスごとに	
15：00	保護者と帰る	保護者にこどもを引き渡す	

3　まとめと考察

この度は参加した現役保育者、元保育者、学生に実践でのふりかえりを依頼した。現役保育士の意見としては、子どもたちは、いつも以上に興奮して楽しんでいたように思える。指導者の見本を見て、そこから自分なりに想像力を広げ、作り出す姿があった。土の匂いがこもっていたので、事前に窓を開けておくなど、換気の必要性を感じた等であった。元保育士の意見としては、初めのつかみが大切だと感じた。子どもたちの目がきらきらしていた。自分の生活の中のことを作り出している子ども、粘土でうどん・ひらがな・漢字などを作るなど、子どもたちの発想力に驚いた。学生からは、子どもは粘土を手で触るだけでなく、足で踏み、顔や太ももで触れて冷たい粘土を体全体で感じていた。保育者はただ声がけするだけでなく遊びに発展させていた。自由な時間が多く、友達と真似をしあうなど楽しく粘土に触れている姿があったなどの意見が出た。

本稿では、初めて取り扱う素材・材料を用いた表現・造形指導が子どもたちの作品や活動にどのような影響を及ぼすかについて観察および考察を行った。

実践例①「砂で描いてみよう」においては、「童仙房」という粉末粘土を用いた表現活動を行った。筆者は水と混ぜることにより粘土化する素材に着目し、教材として取り入れてみた。しかし土粘土の活動そのものが初めてである子どもたちにとっていつも遊んでいる砂場の砂のようでありながら、さらに粒子が細かい童仙房はその感触だけで十分に子ども達の興味を引きだした。

また実践例②「粘土で作ろう」では、大量の粘土を用意し、子どもたちの制作意欲を高め、新しい道具を用いることで様々な土へのかかわり方を提示した。筆者の予想をこえる活動も多くみられた。ただ、道具自体が小さいためか粘土の量に対して、活動が小さいものとなってしまい、粘土の重量感などの体験につなげることができなかったのが次回への課題となろう。

実践例③「化粧土で描こう」では、陶芸用具の中でも化粧土と呼ばれる新しい素材を子どもたちに提供してみた。粘土に色を塗る、引っ掻く、模様が生まれる、粉末土を振りかける、こする、模様が消えるといった一連の動作が活動の中でみられた。それは遊びのようでもあり、創造と破壊の繰り返しでもある。絵画的な制作の場合、一度描いてしまったものの上に、さらに塗り重ねていくと、色が濁り紙が破けてしまう。もちろんそれも造形活動の範疇ではあるが、5 歳児ともな

ると、自分の作品に対しある程度の美的感覚も持ち合わせている。そういった意味では土粘土のこの活動は粘土の再生力も含め子どもたちにとって良い活動になりえたのではないかと推測される。

今後はさらに子どもたちが初めてかかわる活動として、一人 10 キロほどの土粘土を準備した大きな活動を行いたいと考えている。様々な教材がある中、重量感があり、しかも柔らかく怪我など心配がないものはあまり思いつかない。そういった意味でも、子どもたちの豊かな感性や表現する力を妨げることなく、子どもたちのあふれ出るエネルギーを造形により解放させることができるような援助を指導者として継続して行っていきたいと考える。

引用文献・参考資料

1) 文部科学省　2008　幼稚園教育要領　P 11−12
2) 山崎つるこ 2000　美育－創造と継承 P 92−93「芦屋市立美術博物館」
5) 磯部錦司・福田泰雅 2015　保育の中のアート「小学館」P27
3) 深谷ベルタ 2018　造形遊び　「風鳴舎」P 27
3) セチェイ・ヘルミナ 2003　保育園での美術教育「明治図書出版」P 10
4) 古田一夫　編 1988　3.4.5 歳児の粘土指導 12 か月　P 138「黎明書房」
6) ロバート・ヘンライ 2011　アート・スピリット「株式会社国書刊行会」
7) 中村錦平編　1994　母と子のやきものをつくる「株式会社美術出版」